

第Ⅴ章 総 括

1 遺跡の変遷（第 23 図）

縄文時代の遺物としては、SD 2・SD 8 から縄文土器鉢の底部破片 1 点と叩石 1 点が出土したが、遺構の時期とは異なり、流れ込みと考えられる。県の試掘調査でも当遺跡の範囲内で晩期の土器と石鋸形石器・叩石が見つかったが、当該期の遺構は確認されていない。

古代の遺構は A 地区の溝と自然流路である。溝より古い土坑もあるが、時期や性格は不明である。SD 2・SD 3・SD 8 は同一の溝と推測され、断面形や規模から人為的に開削されたものと考えられる。これらの溝からは、9 世紀後半を中心とした須恵器・土師器が多数出土しており、土師器碗・皿は図示した 18 点中 5 点に赤彩が認められ、そのうち 1 点の大型碗に「連」の墨書がある。須恵器は器種が多様で、杯の他に壺・甕・横瓶・鉄鉢がある。このような出土遺物の様相から、周辺に識字層を含む有力者の居館あるいは官衙的な施設があったことが想定される。また、鉄鉢は仏具であり、寺院との関連が窺える。

中世の遺構は A 地区の自然流路 NR 7 のみで、石割川の旧河道の一部と考えられる。古代の SD 3・SD 8 を切っていることから、出土した須恵器・土師器は、元来これらの溝に伴っていたものと考えられ、南側の落ち際に投棄された石臼や、その付近の表土から出土した 15 世紀後半頃の中世土師器が NR 7 の年代の一端を示していると考えられる。

近世以降の遺構は B 地区で検出した。溝は幅約 0.5～1.6 m、深さ約 0.1～0.4 m と小規模で、方向は様々で性格も不明であるが、SD 12 については、北側の延長線上に県の試掘調査で水田 4 区画分にわたって同様の埋土の溝が確認されており、一連の人為的な溝と考えられる。B 地区の溝については出土遺物がないため時期は確証を得ないが、近世以降の遺構としておく。井戸は 1 基で、明治 5 年頃より発売された「神薬」のガラス瓶が出土しており、近代まで使用されていた井戸と考えられる。落ち込みは、昭和 30 年代の圃場整備以前の、小区画水田であった頃の農地に関わる遺構と考えられる。

2 「連」墨書土器（第 15 図・第 8 表）

古代の墨書土器は「連」と墨書された土師器碗（23）のみであるが、大型で赤彩されており、特別な用途に用いられたと考えられる。「連」の墨書土器は全国的にみてもさほど多くない。1 字のものが多数を占めるが、「弓削連」「狛連」「物部連」のように氏族の名が前に付くものもある（第 8 表）。後者の場合は、684 年制定の八色の姓のひとつ、連を指すことが確実であろう。前者の場合も、連を賜姓された地方豪族に関わる可能性があるが、遺跡の性格に関わる問題でもあり、当遺跡の「連」墨書出土の意義は、周辺遺跡も含め今後の調査の進展を待って再考したい。

第 8 表 「連」墨書土器出土例

遺跡名	所在地	時期	種類	器種	釈文	点数
秋田城跡	秋田市	9C 後半	赤焼土器	杯	□（連々連々）	1
手取清水遺跡	横手市	9C 中・後半	須恵	杯	連	1
城神廻り遺跡	羽後町	9C 後半	須恵	杯	連	1
興屋川原遺跡	鶴岡市	平安時代	土師	杯	連々	1
新青渡遺跡	酒田市		赤焼土器	杯	連・連々	4
上高田遺跡	遊佐町		須恵	杯	連・弓削連	2
石岡市内	石岡市		土師	杯	工・狛連	1
神野向遺跡Ⅵ	鹿嶋市		土師	皿	連々	1
半田中原・南原遺跡	渋川市		須恵	杯	連	1
八木連荒畑遺跡	富岡市		須恵・土師	杯・碗	連・□（連）	5
武蔵国府岡連遺跡	府中市	9C 前半	須恵	杯	連	1
南鍛冶山遺跡	藤沢市		須恵	杯	連万	1
居村 (B) 遺跡	茅ヶ崎市			杯	連々	1
馬越遺跡	加茂市	9C 後・10C 初	須恵	杯	連	1
水橋田伏遺跡	富山市	9C 後半	土師	碗	連	1
宮ノ前第 2 遺跡	韮崎市	9C	土師	杯	連	2
水口町遺跡	熱海市	10C 末・11C 初頭	土師	杯	連／連	1
手原遺跡	栗東市	8C 中頃	須恵	杯他	連	5
上石遺跡	豊岡市	8C 後半・10C 中頃	土師	杯	連	1
平城京左京二条二坊・三条二坊	奈良市	8C 末	須恵	杯蓋	岡、岡、 □、岡部、 岡連□	1
西隆寺跡	奈良市	奈良	須恵	杯蓋	□、□、大 連□□、 （その他 判読不能）	1
平城京右京八条一坊十一坪	大和郡山市	奈良・平安	土師・須恵	杯・杯蓋	連	2
平城宮跡	奈良市		須恵	杯	物部連安万侶	1
石神遺跡	明日香村	7C 後半	須恵	杯	物部連	1
周防国府跡	防府市	9C 後半	須恵	杯	□（連々連々）殿	1

※明治大学日本古代学研究所『全国墨書土器・刻書土器、文字瓦横断検索データベース』を参考に作成